



説教要旨 「和解の勧め」

ルカによる福音書 12章 54～59節

イエス様は、群衆たちに向かって「偽善者よ」（56節）とされています。「偽善者よ」、こう呼ばれて、群衆たちはどんな思いになったでしょう。偽善者であるとは、自分の内と外との間に食い違いがある、分裂があるということです。うわべは取り繕って、善良で親切で、信仰深い自分を人には見せている。そうやって人を欺き、裏切り、なによりも神を裏切っている。空や地の表情を読み取って、それに対応する術は心得ていながら、なぜ神のみ顔の前で知らん振りを押し通せるのか。表面上は信仰深いかのように取り繕っておいて、内側では「神様なんて関係ない。自分で自分の人生を歩むのだ」、と決め込んでいるのではないのか。そう問われて、私たちは反論できないのです。

空や地の様子を見極めることを心得ていながら、なぜ、神が働いてくださっているこの時を、正しくわきまえることができないのか。イエス様はそう語られたすぐ後で、訴える人と仲直りしなさい。とされています。

裁判が開始されたのなら、もはや後戻りできません。裁判官から看守に引き渡され、看守は牢に投げ込まれる。そしてすべてを清算しきらなければ、牢から出てくることはできなくなる。だから、役人の所につく前に自分を訴える人と仲直りをしなさい。神の裁きの時に備えて、隣人と和解をして、その時に備えなさい。イエス様はそう教えてくださっているのです。

主人はまだ帰ってきやしない。神の裁きの時はまだまだ先だと高をくくり、自分が主人であるかのようにふるまってしまう私たちです。神の前で見せかけの自分で誤魔化そうとしているのが私たちです。神のみ前に立たされた時、なんの申し開きもできずに滅びるしかない私たちなのです。しかし、神のその独り子が裁きの座から降りてきて、私たちに代わって十字架に架かり、私たちが受けるべき裁きを代わってその身に負ってくださるのです。私たちを愛してやまない救い主が、罪人である私と、神との和解を仲立ちしてくださっているのです。



(2019・8・25 説教者：稲垣真実)